

東京大学駒場Ⅱキャンパス1号館

(旧東京帝国大学航空研究所風洞部建物)

メートル

三米風洞を重要航空遺産として認定

日本航空協会 航空遺産継承基金事務局

✧ 重要航空遺産とは

当協会は、歴史的文化的に価値の高い航空遺産の意義を広く皆様に知っていただくとともに、後世に遺していくための一助となるべく「重要航空遺産」を認定しています。

「重要航空遺産」の認定に当たっては、以下の3つの要件を満たしていることを条件とし、航空遺産継承基金の専門委員会での審議を経て認定しています。

1. 航空史または航空技術史の上で意義を有すること。
2. 歴史的情報を留めた固有の状態を保持するなど文化史的価値を有すること。
3. 現存する資料数が極めて少ないなど、希少性が高いこと。

当協会では「重要航空遺産認定制度」を2007年に定め、2008年に国立科学博物館が所有する「YS-11 輸送機量産初号機」および埼玉県が所有する「九一式戦闘機」を「重要航空遺産」として認定したのを皮切りに、これまで三米風洞を含めて10件を認定しています。(詳細については当協会ホームページをご参照ください。 <http://www.aero.or.jp/isan/heritage/aviation-heritage.htm>)



① 1月25日、重要航空遺産の認定証と記念プレートの贈呈式にて。
左から岩崎晃先端研教授(当時)、中村尚先端研副所長、東昭名誉教授、野村吉三郎日本航空協会会長(当時)、渡部勲元技官、佐藤信之日本航空協会専務理事

✧ 認定証の贈呈式

認定証の贈呈式は2019年1月25日(認定日でもあります)に、東京大学駒場Ⅱキャンパス13号館旧教授会室で開催されました。式には先端科学技術研究センター・中村尚副所長をはじめ東昭名誉教授、岩崎晃教授、渡部勲元技官など関係者約20名が出席されました。日本航空協会会長・野村吉三郎から中村副所長に認定証と記念プレートを贈呈しました(写真①)。当日、三米風



② 東京大学駒場Ⅱキャンパス1号館外観(6月1日撮影)。



③ 6月1日の見学会の様子



④ 風洞内のプロペラ（直径4 m）を駆動するジーメンスシュッケルト社製の500馬力モーター

洞での記念写真は1号館が耐震工事中のため安全帽を着用しての撮影になりましたが、その後耐震工事も無事終了し、5月31日、6月1日に開催されたオープンキャンパスでは多くの見学者が訪れました（②、③）。

管理者 東京大学 先端科学技術研究センター

認定理由 三米風洞は1930（昭和5）年に東京帝国大学航空研究所（以下、航空研究所）の風洞部の実験施設として建設された。戦前はもっぱら航空学の研究に使用され、1937年に航続距離の世界記録を樹立した航空研究所長距離機（通称：航研機）、1944年に非公式ながら航続距離の世界記録を作ったA-26や層流翼の開発などに貢献した。第2次世界大戦後は、日本の航空に関わる活動が一切禁止される中でも奇跡的に破壊を免れ、YS-11などの国産航空機の開発で活用される一方、自動車、鉄道、船舶、建築物、スポーツなどの研究にも活用され、我が国の産業および文化の発展に貢献した。建設以来、21世紀に入っても実験に使用されてきたが、発電機、モーター（④）、制御装置、計測装置（⑤）や木製の吹出口、吸込口（⑥）などに創建当時のオリジナルティを多く残しており、貴重な航空遺産と言える。



⑤ 吹出口の真上に位置する計測装置（吊線式5分力天秤）



⑥ 吹出口（左側、直径3メートル）と吸込み口（右側）。人物は渡部 勲元技官